

<ポニーテール母と王子と息子>

通路になった通りにレンガ造りの円形の横穴式住居が連なる一軒家だが、主に寝室一つとリビングやキッチンなどがある二部屋しかない住居。あまり裕福ではない階級の母子が集まる母子エリア。

王子は一つの入口へ向かった。

コンコン！

「王子だけど 開けてくれるかな？」

「はい ちょっと待っておくれ」

美味しそうな料理の匂いが漂っている。

現れたのは きれいな黒髪をポニーテールにした背の高いアスリート系母親だった。バストがメロンように大きかった。尻もデカジリだが、決して肥満な所がない。太ももは鍛えているのか尻の大きさに合わせてムッチリとしっかりとした長くきれいな脚だった。

<褐色デカメロンアスリートタイプの母親だ！やった！>

「へえ！いいカラダしてるね お母さん」

「イキナリそれかい？他に良い褒め言葉はなかったのかい？」

嬉しそうな雰囲気漂わせる母親。

王子は女を舐めるように見るとドカドカと入っていく。

「あたしの家に、久しぶりに男が入って来たよ！」

どうやら食事中だったようだ。木でできた簡素なテーブルの上に皿が並べられていた。

すぐ横の椅子にはびっくりしてその様子を見ている少年が座っていた。

王子の後ろをついていくように女は歩きながら。そしてその後を牝母親衛隊の撮影隊が5人・・・

「あんたが毎夜変態の宴を催している 変態王子かい？うちの息子と同じくらいの年じゃないかまったく。うちのコに変なこと教えないでおくれよ？」

「変なことってなに？」

知ってて聞く王子。

「まったく、ばかだねえ・・・」

その後ろを家来数人が付いてくると、

「じゃあこの辺に大鏡セットしてよ」

「かしこまりました。」

そういうと家来共は 母親の許可も得ずに持ってきた大きな鏡を部屋の壁の中央に設置し始める。ハメ撮り用のカメラも。

「なにをしてっ！」

「じゃあこれに着替えてよ」

王子は小さな黒い布切れの塊を女に差し出す。

「なにって 超マイクロビキニだよ、ほらっぴちぴちの超食い込みだよ」

ポニーテール母はなんとか安心感を取り戻そうとする・・・

「まったく。噂通りのめちゃくちゃな王子さまだよ、ほんと」

「これは。。小さすぎじゃないかい？」

「大丈夫だよ 伸びる布地だからぎゅうぎゅうに詰めれば良い。」

「そういう事じゃなくてまったく。いきなり家に来たと思ったらこんなぴっちぴちな変態下着渡すかね 普通。ま 王子の命令なんだろう？」

「王子には生活のこと、いつもいつもお世話になってるからねえ 仕方がない・・・」
王子は女が住み、特に母子が多いこの地域には生活費などすべてを援助をしている。
まったくしかたない奴・・・そんな表情で王子を見つめるポニーテール母は、それを受け取り歩いていく。。

ポニーテール母に着いていく王子。

「あんたはダメだよっ」

バタンッ。そう言われたのに王子と一緒に部屋に入ってしまった。

ポニーテール母が王子になにか言ってる声、くぐもった王子の声・・・

「あんっ！」

息子は確かに聞こえた・・・自分の母親の喘ぎ声・・・

「あ・・・は！」

「ん・・・ふう・・・！」

15分もたったのに出てこない。

「まったくもうっ」

部屋から出てくるとポニーテール母の雰囲気が変わっていた・・・照れているような・・・怒っているような・・・

尻とおっぱいが丸出しのような格好で出てきた。ただ小さな布切れを付けているだけだった。

張り詰めた、服を着た時の見かけよりもかなりおおきなおっぱいをぶるんぶるん揺らしながらポニーテール母が出てきた。見てはいけない、見せてはいけないものを見せているあの背徳感・・・

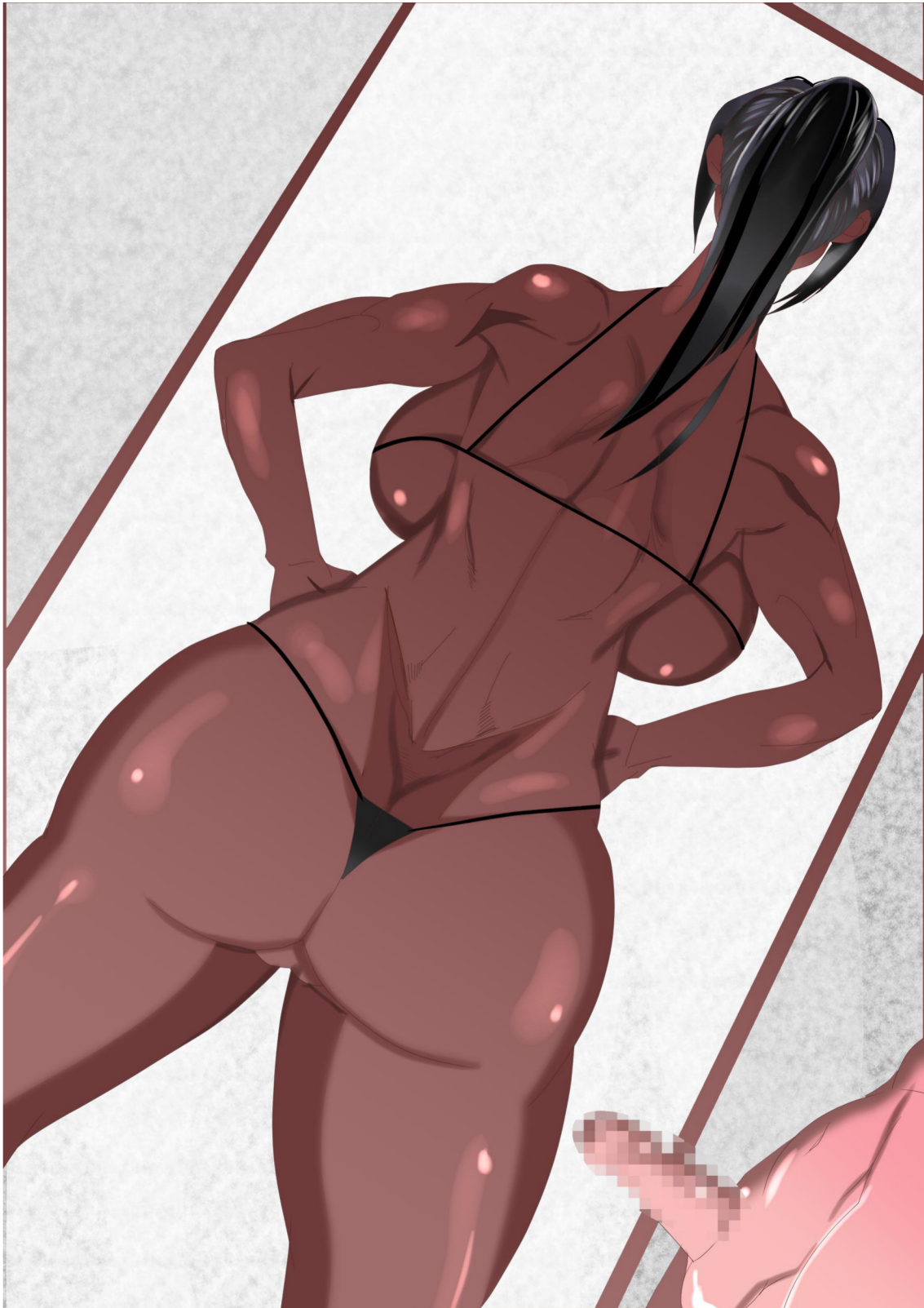
小さな3センチ位の黒い三角形の布地でかろうじて左右の乳首が隠されている。いかにも不自由で一方を引っ張れば一個はぼろん！と出てきそうだった。下もマン肉を食い込ませるくらいの僅かな布地。息子はここまで露出させた母親を見たことがない・・・食い込んで溢れ出るまん肉には少し陰毛が見えている。少ししか隠せない布地の面積なのにまんこを隠そうとしているのが逆にいやらしい。尻は紐パンで紐一本で左右に別れ、でーんと溢れ返り遮るものはなかった。紐一本でこんな大きな尻が隠せるわけがないと諦めてぶるんぶるん揺れている。歩いて食い込んだ布地を元に戻す仕草を見せる。その動きでズレてしまったビキニも元に戻す。ちらっ。ポニーテール母の乳首が一瞬見えた。というか布から飛び出した。

「はぁあっ！！ごく。。」

その両方を見た息子は生唾を飲み込んで見続けた。

王子は黒のビキニブリーフに着替えていた。上を向いて芯が入った肉棒がびんびんと蠢きびちびちに引き締められていた。そんなポニーテールの母と王子とのツーショットに息子は異様なほど興奮した。

「おい、準備いいか？」



鏡に映る王子のビキビキビンビンちっぽとポニーテールの母のでかけつ。パシャ！ぱし
やばしゃ！そんな二人をしっかりと撮影隊はカメラに映す。
「もう。サービスショットじゃないんだよっじろじろ見ない！」

母は手のひらで息子の視線からだけアソコを隠す。息子のほうが逆にコソコソしてしまっている。

部屋の四隅にカメラはセッティングし終えていた。

<王子とは部屋でお互い裸になったのに？王子には見せたのに？>

ポニーテール母は息子の視線を遮るように両手でアソコを隠すが、真後ろの鏡には大きな尻がブルンツと揺れるのが丸見えに写っていた。

そのポーズのせいで母親のでかばいがむにいつ寄せられこぼれ落ちそうだ。

「お前の息子 勃起してるぞ」

「ちょっと！」

「さっきのお前の乳首見えたからな、ビン勃起だ！」

気まずい雰囲気が漂う母と息子。

女撮影隊たちも母親と同じような格好になりおっぱいを丸出しにして撮影し始めた。

王子は母親の正面に立ちスケベそうな目でポニーテール母の身体中を舐めるように見つめる。

勝ち気な母が王子の視線を遮ろうともしないことに、王子のビキビキ股間をチラチラと見る母に息子は不安を掻き立てる。目の前に乳首があるところまで近寄らせている。

「頭に両手を乗せて。胸を突き出してよ」

「はぁ？ どうかい？ まったく」

ポニーテール母は頭に手をおいて胸を突き出した。メロンのようなデカパイ。わずかばかりの布地で乳首を隠したでかばいがポインツと突き出される。爆弾ボイン。ぶるるん！ ゆさゆさっ！ 爆弾ボインが揺れた。

「すごいボインボインだねっ！ すげー。こんな大きなおっぱいにしゃぶりついたら一体どうなるんだっ・・・お母さん、身体鍛えてるんだねっ！」

掌に乗せてポインツポインツと弾ませる。

「ちょっと！」

むぎゅっ！ でかばいを握りしめる。

「あうんっ！」

<なんで母さん辞めさせないの！？>

「おっと手が滑った」

びーん！

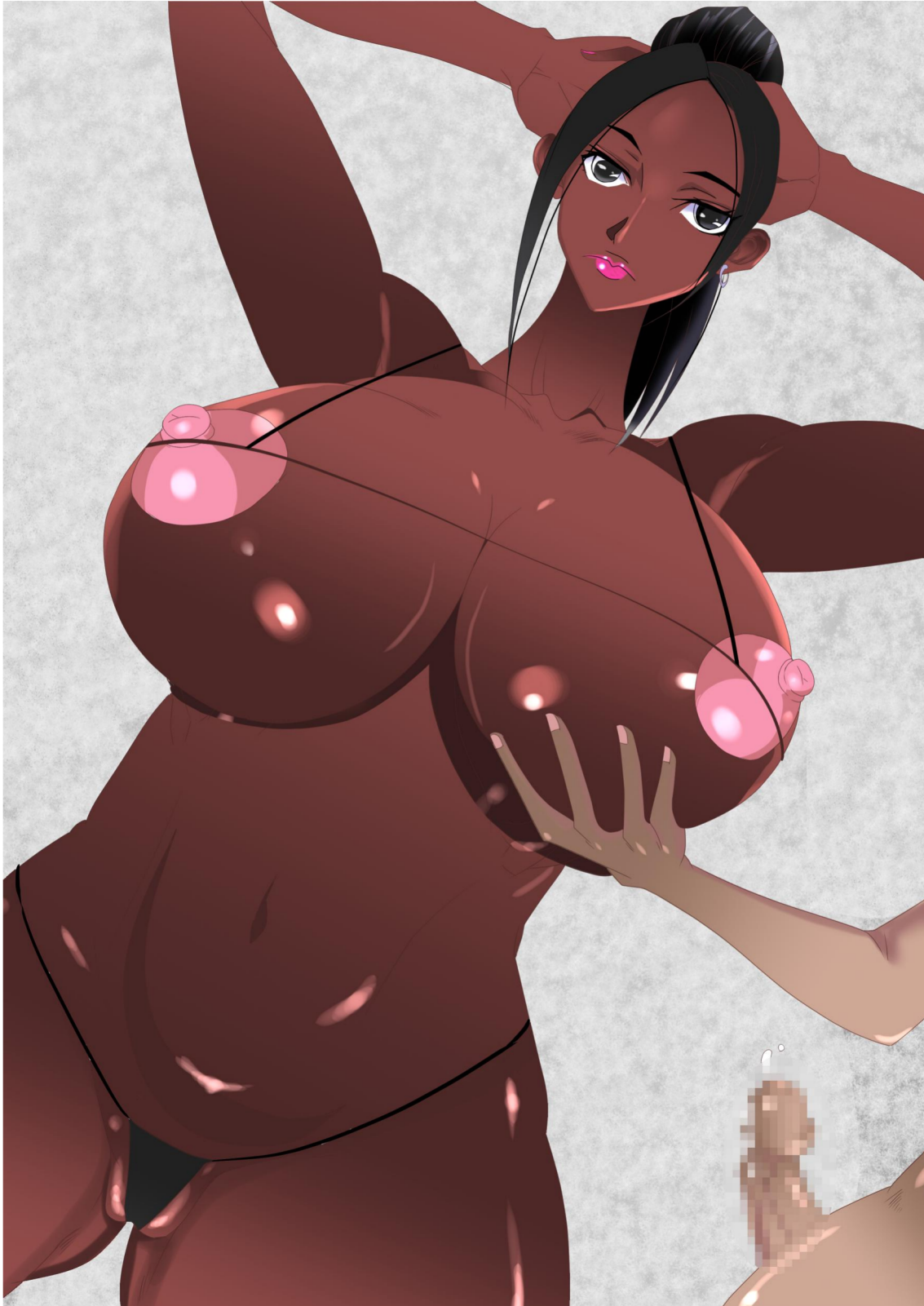
怒るスキも与えず王子はそのおっぱいとおっぱいの間の紐を勢いよく引っ張った。

「あうんっ！」

ぼろろんっ！ ぶるるんっ！ ぶるるんっ！！

大きなでかばいが勢いよく2個とも飛び出した。ボインボイン！ 紐ブラの上から飛び出した！。デカくて重いおっぱいがバウンドしている。息子の目にデカパイボロンが焼き付いた。一生焼き付いて離れない。

「ウヒョー！ でかばいが2個も飛び出してきた！」



<？、おかしい、怒るか、引っ叩くかするはずだ、母さんなら。>
ポニーテール母は息を荒くさせて頭において胸を突き出したままにしている。母は王子の好きにさせている！止めようとしめない！おっぱいが飛び出ているのに！

ゆっさゆっさ、ゆっさゆっさ！

王子は紐を揺すって勢いよくおっぱいを揺らす。息子の見ている前でいきなりでかばいを握りしめた。むに！ぶにい！手から溺れ落ちそうな乳房。

「はあん！」

王子は指で乳首を数回往復した。

「じゃあ いただきますっ」

「あっ！」

王子の舌がレロレロレロオ～と蠢き襲いかかった。

ぶじゅるるるっ！！

大きな乳房に王子は舌を伸ばしてしゃぶりついた。

ぶじゅっ！ぶじゅっ！ぶじゅるるる！

舌で巨乳を舐め回す。

ポニーテール母は息子と目が合う。王子の肩に手を置いているがイヤがっていない。

「あ！あんたは部屋へ行きなっ！あっ！あっ！」

「ぶじゅるるるうううっ じゅぽお だめだそこにいろ しっかり見てろっ じゅぞぞぞっぶぽおんっ！」

「見ちゃダメっ、いやあん！」

「息子の前でするほうが興奮するうっ」

「あっ！あうっ！あっだめっ！いやんっ！いやっいやいやっ！見ちゃだめえ！」

王子の肩に手をおいて嫌がるポニーテール母とその肩を引き寄せおっぱいに力付くでしゃぶりつく王子。

王子は息子を見ながら もう一個のおっぱいを下からたぶたぶたぶたぶと揺らした。それから握りしめた。

「う～ん シンデロラよりも背は高いけど おっぱいはシンデロラのほうがデカかったな はぶうっ！」

とはいってもかなり。相当な大きさと重量である。

「シンデロラのおっぱいがほしいけど 今日はコレでいいや。ゾクゾクするっ！ぶじゅるるうう！」

「うっく！ううっ！」

時々身をすくめるようにびくっと蠢きながら 困惑した目で息子を見つめるポニーテール母。鏡に映ったデカ尻がぶるぶるっと揺れている。息子はここまでエロい尻と「バックを見たことがなかった。

「お前の息子、ち ぽぎんぎんにしてるぞっ」

「おい！、あいつにもビキニパンツはかせろ」

はぶうっ！はぶうっ！はぶうっ！はぶうっ！ぶっっぽお！

たっぷりとでかばいを頬張り舐める。右から左に、左から右に。

王子は口からおっぱいを吐き出すと、両手の指先で乳首をクリクリし始める。

クリクリクリクリクリクリクリクリッ

中指と親指の間に勃起乳首を挟み ピーンッ！ピーンッ！人差し指で乳首を何度も何度も跳ね上げた。ぶじゅるるるっ！時々乳首に吸い付く。

「あっ あ！ いやっ くうっ！」

ビクビクッ！ビクンッビクンッ！ポニーテール母は腰を突き出して悶える。

背面の鏡にデカ尻がクネクネ、グネグネ・・・

いやいやとしながらも王子の手首を掴みくねるポニーテール母の力は嫌がっておらず、息子と王子に視線を行ったり来たりさせる。ビキニパンツを履いてボッキがよく解るようになった息子の股間にも視線がいく・・・息子のボッキがビッキビッキしている。ポニーテール母は息子の目にはさすがに卑猥だと思ったのか、息子の方を振り向きながら乳首だけを隠そうとする。

王子の濡れた指が股間をまさぐった。手がくねり、クリトリスを弾いた。

母親の真珠集中攻撃。

「んうー！」

ポニーテール母の腰が跳ねた。ぶるるんっと跳ね上がった大きな尻が揺れた。

責められる母、感じる母。もだえる黒Ｔバック母尻。

その間にも王子はおっぱいを頬張り自分で指を咥えて濡らしクリクリクリクリピーンッ！ピーンッ！ピーンッ！ピーンッ！乳首と真珠攻撃をひたすら繰り返した。

「ああっ！あっ！いやっいやああっ！」

20分ほどそのままクリトリスクリクリビーンビーン&乳首吸い付きは続いた。ぬれぬれの乳房、ポニーテール母は王子の手首を掴んでいる。乳首は信じられないほどビンビンに勃起しヌルヌルになった。そこへ左右の両乳首に口を被せていく。10分ほど続けられる。ちゅうちゅう吸い付いて口の中で乳首を舌で磨き上げる。そして不意をついたクリトリス攻め。執拗なクリトリス弾きに女の腰が跳ね続ける。

「んおっ！おっ！おお！んおお！」

「んぽおっ勃起乳首完成！」ぴーん！ピーン！

「あうっ！うくうっ！」

「よく見ろ！完全勃起乳首だっ！」

乳首を持っておっぱいを引っ張り上げた。

「くうう～っ！ ああっ あんっ！」

親指の先くらいの見事な勃起乳首ができあがった。

「ほら見ろっ よく見ろ！」

でかばいの根元に手を当てて思いっきり揺さぶった。

「ぬれぬれの、でかばいだああ！」

濡れたでかばいがぶるうん！ぶるうん、踊った。

「じゅあそろそろ台所の台に手をつけて ケツを突き出せっ！」

おっぱいを揉み回す。

「お尻を？」

ちゅっちゅと左右の乳首に吸い付いた。

「あうっ」

うっとりした顔のポニーテール母。



ポニーテール母は息子に困惑した流し目を送るとゆっくりと振り返り、台に肘をついて大きな尻を突き出した。